

IV

創造都市と都市デザイン 平成23年1月19日



講師
秋元康幸

鈴木伸治：本日は、APEC 創造都市事業本部の創造都市推進部長の秋元康幸さんにお話をさせていただきます。横浜では2004年から文化芸術創造都市という取組みを始め、秋元さんは担当部長ということで先頭に立って創造都市を推進されています。

横浜では1980年代後半から、現在の創造都市の展開につながるような取り組みがありましたが、資料等には殆ど残されていません。本日はその時代から、そして現在に至るまでの流れについてお話を頂きたいと思います。

秋元：私は現在、創造都市の担当ですが、入庁して建築局、みなとみらい等を担当してから都市デザイン室へ配属となりました。その当時の仲間が、今の室長の中野さん、前の室長だった小沢さんです。しかしながら私の都市デザイン室担当は1年で終わり、その後は都市計画局の再開発課の係長を1年やり、また都市デザイン室に戻りました。

当時、都市デザイン室で担当したのはデザイン

フォーラムという都市デザインの国際会議でしたが、実際に都市デザイン室の担当は極めて短い時間でした。他の部署の担当のころも都市デザイン室で担うような仕事も手がけていたので、その印象が強くて「都市デザイン室的」な人間だと思われるようです。今日は、私が都市デザイン室でその後、東大の教授になった北沢さんの下で、どんなことを展開したか、その展開が今の創造都市につながった背景などをお話したいと思います。まず、前半は創造都市の概略をご説明いたします。

創造都市への背景

私と北沢さんと2004年に文化芸術・観光振興による都心部活性化検討委員会を立ち上げました。当時は、都市デザイン室が歴史的な建造物や港の景観とかを完成させ続けてきた状況でした。この委員会はソフトや文化芸術を都市へ取り入れることによって都心部の活性化を図る委員会でした。【図1】

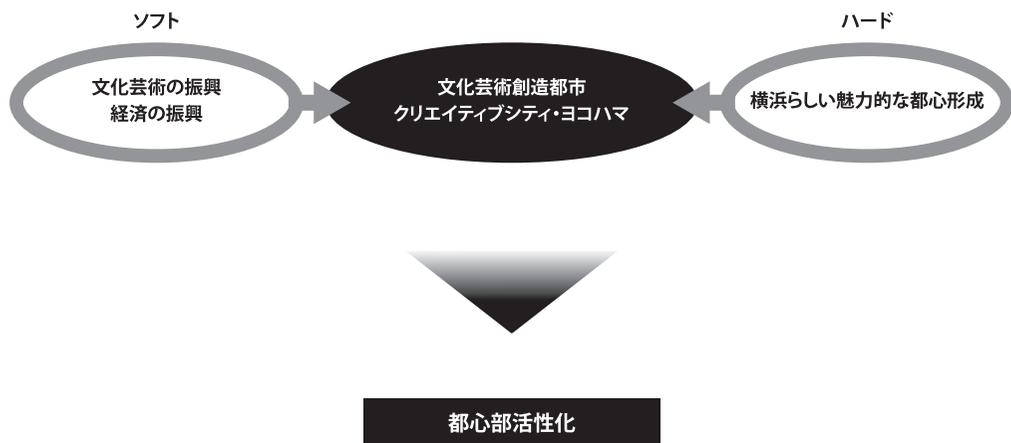


図1：創造性による都市再生ビジョンの考え方
2004年1月 文化芸術・観光振興による都心部活性化検討委員会 提言

創造界限拠点

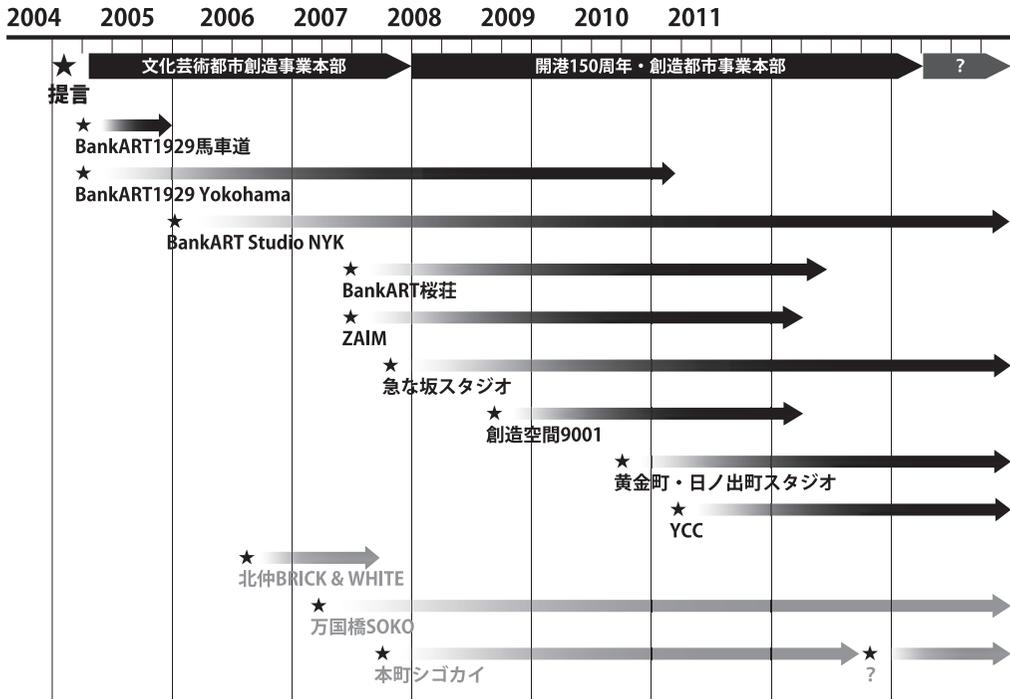


図3：創造界限拠点の系譜



図4：黄金町バザール
撮影＝中川ちあき

レを用いて創造都市を展開するという方向性を、昨年度新たに作りました【図2】。

公設から民設へ

昨年、私が創造都市の担当になり、拡大した取組は「都心部の復権」です。この背景は横浜市の予算が非常に少なくなってきたことです。これまでは創造界隈拠点は公設で作りました。BankART1929もその一つで、市が建物を日本郵船から借り、市からNPOに貸すという公設民営的な運営をしていました。しかし、こんにちでは大きく予算が減っていますので、民設による創造界隈拠点到にシフトすることになり、昨年頃から動き出してきました。

一つの事例としては、「本町ビル・シゴカイ」です。こちらは純然に民設によってできてきています。市として、このような展開の支援を強化しようと試みています。また古い建物をリノベーションして、入居者に入ってもらい活用するリノベーション・コンバージョンの助成も昨年頃から始めました。このような動きをもって創造界隈拠点を拡大する動きが始まりました。

また「ランデブー・プロジェクト」は、民間の企業とアーティストを引き合わせ、組んで、活動するプロジェクトです。このプロジェクトはワコール・アートセンターさんが取り組んでいます。

創造界隈拠点として、YCC（創造都市センター）、BankART、急な坂スタジオ、象の鼻テラス、藝大等が主な公設民営です。藝大は国立大学ですから、厳密には民営と異なりますが、公設的な創造界隈拠点として活動されています【図3】。

黄金町バザール

そして横浜の創造都市のもう一つ大きな拠点は、黄金町が上げられます。この地域はかつての売春街を文化芸術の力を用いて地域を再生する取組で、まちづくりという形で活動しています。黄金町ではまちづくりの一つとして、毎年秋に「黄金町バザール」というイベントを開催し、このイベント通して街へ文化を

展開させるという取組を行っています【図4】。

民設の創造界隈拠点については、拠点や活動の支援をして育てる動きを打ち出していきたいと思っています。本町ビルシゴカイは現在「宇徳ビルヨンカイ」へと移り、さらに活発な活動となっています。また万国橋SOKO、馬車道の大津ビル、野毛Hana＊Hana等は、公設ではなく民間による創造界隈拠点として充実した展開がなされています。大津ビルは建築家などのテナントを集めてクリエイティブな拠点として運営がされています。横浜市の創造事業の取組よりも大津ビルなどの民設民営の取組の方が先に展開していました。現在は民設民営の方が増えており、一方で公設の施設は財政の状況が思わしくないので減ってきているのが今の状況です。

アーティスト・クリエイターと都心部

またアーティスト・クリエイターの支援を創造都市では実施しています。リノベーション費として1,000万円までの設備投資の補助金、事務所の移転・開設助成として最大200万までの助成があります。これらは都心部の復権ということで展開しています。

これまでの横浜はみなとみらいが経済的活動の中心であり、大企業の誘致などを行いました。しかし横浜はナショナルチェーン店などが街中に溢れてしまうことを危惧しており、横浜の個性の展開や活性化のため、クリエイターたちが集まるような地域を目指しています。そこで中小規模の事務所への助成や古いビル等のコンバージョン費用の助成、かつ安い賃料で借りられる場所を増やすという試みも昨年度から始めました。

その他、アーティストの支援では、先駆的な芸術活動の助成や、企業活動の助成、また大学の誘致活動をしています。ランデブー・プロジェクトは実験的な試みですが、アーティストとクリエイター、福祉、企業のコラボレーションを昨年度から始めました。

このランデブープロジェクトは現在、障がい者の福祉施設とのコラボレーションを中心に展開しています。これまでは障がい者のみなさんが施設内で自分達だけで織物などを制作していました。その活動へ、

土井一成
小沢朗

今井信二
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

横浜トリエンナーレ2011に向けての考え方

まちにひろがるトリエンナーレ

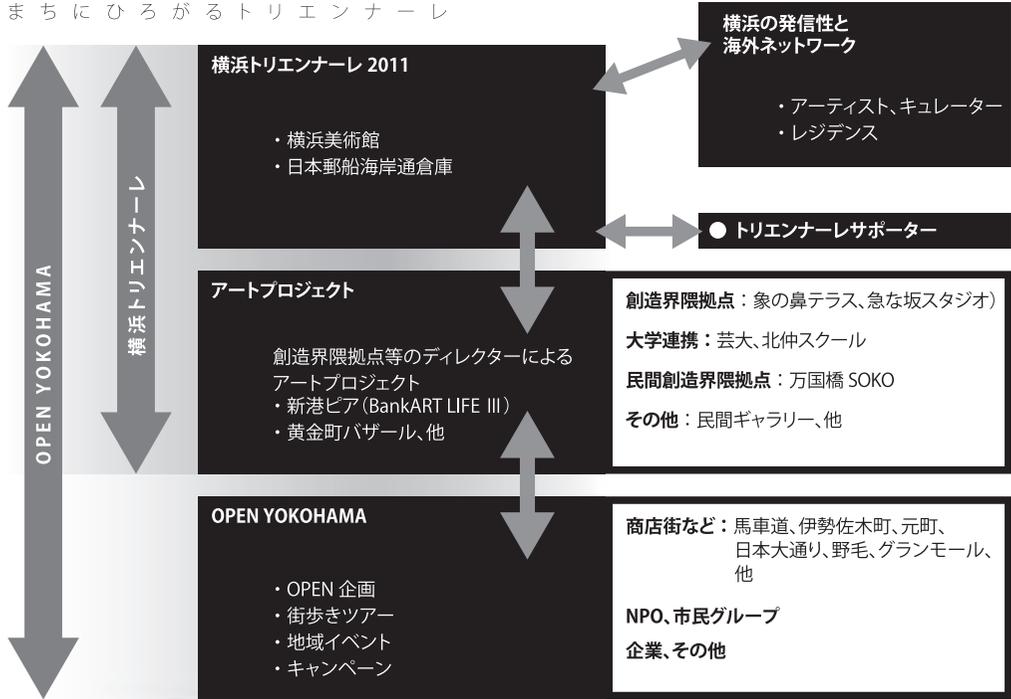


図5: 横浜トリエンナーレと連携してまちの活動を共に展開させる



図6: OPEN YOKOHAMA2010
協力: OPEN YOKOHAMA 実行委員会

アーティストがデザインを手掛け、障がい者の方の織物の技術とデザインをコラボレーションさせ、商品開発と売上促進を試みた事業なのです。

戦略的にトリエンナーレを開催する

創造都市の構想ではトリエンナーレは大きな柱です。トリエンナーレという催しと連携して、まちの活動を共に展開させようとしています【図5】。これが2011年に向けたトリエンナーレの考え方です。今回のトリエンナーレは横浜美術館とBankARTが中心の会場になります。「アートプロジェクト」では7年間の創造界隈の活動を踏まえて各拠点のディレクターに、トリエンナーレの期間に合わせた活動をお願いしています。街へ拡大されたトリエンナーレという意識で展開していこうと試みています。

その一つに新港ピアの展開が上げられます。今回はNPOのBankARTがトリエンナーレ期間中に日本郵船の倉庫を明け渡しますので、代わりに新港ピアでBankARTが活動を展開することになりました。また黄金町バザール、象の鼻テラス、藝大、北仲スクールにもお願いしています。このように様々な創造界隈拠点が連携していく試みや、まちの中に広がるトリエンナーレを展開しようとしています。

また去年から始めた「OPEN YOKOHAMA」も、まち中のいろんなイベントを紹介するキャンペーンになっています。今年はトリエンナーレと連動して開催することになりました。ですから、トリエンナーレを中心に様々なアート・プロジェクトが広がり、また商店街のイベント等とも連携して、この界隈全体でフェスティバル感を盛り上げる戦略です。

私たちにとって展示会としてのトリエンナーレが成功することも大切ですが、トリエンナーレによってまちがどのように活性化するか、人がまちの中にどのように流れるかということ、考えていくことが創造都市における私の使命であると思っています。ですから「まちに広がる」という展開をしようと考えています。

今年のトリエンナーレは8月の夏から開催して夏休みのお子どもたちにも参加してもらおうと考えていま

す。またアート・プロジェクトとして新港ピア、黄金町バザールを中心に、象の鼻テラス、寿地区、KAAT等と連携していきたいと思っています。そして、まち中に衛星状に活動の点が広がるように、まち全体に広がる構想を持って取組みたいと思っています。

OPEN YOKOHAMA

昨年度から実験的に始め、鈴木先生に企画を作っていたいただいた「OPEN YOKOHAMA」は去年からの新しい事業です。ここではクリエイティブ・シティ「創造都市」を活用して都心部の活性化、都心臨海部を市民や地元の方、NPOなどみなさんに活用してもらい、様々なイベント等を開催しています。

昨年は9月からAPECまでの2カ月間に約200を超える都心部のイベントがありました。昨年は実験的ながらも都心部の魅力と資源の活性化を複合的につないで、市民力、地域力を生かした新たな横浜の魅力を発信していこうと「INVITATION to OPEN YOKOHAMA」【図6】というキャンペーンを開催しました。

OPEN YOKOHAMAというのは、「開港を経て発展した横浜にふさわしく、開放的で自由な横浜らしさを表現している」ということでもあり、横浜のおもてなしの心でもあります。横浜の未来を支える言葉を活用したキャンペーンとして、都心部のマザーポートエリアと呼ばれる横浜駅から山手にかけて、また関外の黄金町周辺でもキャンペーン事業を開催しました。

これらは単にイベントを開催するだけでなく、少し工夫を加えています。一つは「オープン」。OPEN YOKOHAMAという言葉にちなんで、いろんなところを公開しました。歴史的建造物、バックヤード・ツアー等、各施設の裏方や実態も含めて皆様にご案内です。ストリート・ミュージックも含めて、まちなかを開き、まちの中で今まで見られなかったところや、活用されてなかったところを段階的に開放する事業がありました。

OPEN YOKOHAMAでは、まち歩きツアーを展開し、まちの活性化、拠点との間を結ぶような仕掛けを手掛けました。まちの中へ人を回遊させる方法を考え、シティガイド協会、アーティストの方々等、たくさんの

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

主な地域イベント

- 黄金町バザール
- ドガ展 [横浜美術館]
- 朝倉撰展 [BankART Studio NYK]
- 横濱万国橋覧会10
- 赤レンガオクトーバーフェスト2010
- 横濱 JAZZ PROMNADE 2010
- 元町チャームینگセール
- 野毛大道芸 2010 オータムフェスティバル
- 国慶節
- Y150メモリアル春節燈花
- 第35回中区民祭り ハローよこはま 2010
- 横浜カーフリーデー 2010 & モビリティウィーク
- S T スポット
- 馬車道まつり
- その他、200を超えるコンテンツ



図7：OPEN YOKOHAMA 2010
各地域イベント情報が掲載されたパンフレット

方に協力をいただき、この期間中に30本ぐらいのまち歩きツアーを新たに実施しました。

いろんなイベントを一体的に情報提供することが「INVITATION to OPEN YOKOHAMA」の主なコンテンツになっています。

施設の公開では、市役所の市民広場をアートで飾っていきました。これは前回のトリエンナーレの時に開催し、このような展開もOPEN YOKOHAMAで取り入れていく試みです。県知事室のオープンに合わせて市長室もオープン・一般公開しました。

「関内外 OPEN」は、横浜都心で働いているアーティスト、建築家、デザイナーなどの事務所や、仕事場を、二日間にわたって一般公開イベントです。ストリートを舞台に音楽を楽しむイベントとして日本大通り、伊勢佐木町、馬車道などで「STREET OPEN」も開催しました。「HERITAGE OPEN」は都市デザイン室とも協力して、歴史的建造物のツアーや開放して皆様に公開するイベントを開催しました。

地域のイベントとして横浜市と地元と共に取り組んでいる「黄金町バザール」、「ジャズ・プロムナード」、また商店街が中心に開催する元町の「チャミング・セール」、中華街の「国慶節」等、様々なイベントがあります。NPO等の多くの方が横浜の都心部で文化、国際交流等、大変多くの活動があることが改めてわかりました。そして、これらの活動を一つのパンフレット、ガイドブックまとめ、みなさまへご案内したのです。

昨年のOPEN YOKOHAMAはエリア別に活動やイベントを網羅したガイドブックをつくりました。できれば今年はトリエンナーレと連動させてガイドブックへもトリエンナーレについても掲載したいと思っています。トリエンナーレに来た人も、横浜の商店街など、みんなが地域を回遊できるような仕組みを試みたいのです。

昨年の街歩きツアーは商店街を歩くツアー、「聞き耳プロジェクト」はワコール・アートセンターが企画しアーティストがまちを歩きながら録音した音声を聞きながらアーティストの歩みと同じルートを散策するプロジェクトをやってみました。今年はこのようなツアーもガイドブックに掲載してトリエンナーレと

合わせて皆様にご案内したいです。

昨年は INVITATION カードを著名人も含めて多くの方に横浜のいいところ、自分の好きな場所を記入したカードも作ってもらいました。このカードには長谷川理恵さん、藝大の伊藤有吉先生等にも、自分の気に入っている横浜の場所を書いてもらいました。紹介する手描きのカードを作りました。

創造都市へ

ここから本日の本論で都市デザイン室においてこの創造都市がなぜ生まれてきたか、ということをお話できればと思います。

今から40年程前に都市デザイン室ができ、以降40年に渡って、都市デザイン室では都心部強化プロジェクト、みなとみらい、郊外部などを展開してきました。そして、まち並み形成、歴史、水・緑、等へと展開し、こんにちの都市デザイン室の事業へ広がってきている、というところが今の状況だと思っています。

当時、私と小沢さんと中野さんが都市デザイン室に担当者として配属され、小沢さんは歴史の担当、中野さんは私の印象では「水緑」系の担当でした。私はシンポジウムやイベントなどソフトを手掛けるような位置付でした。都市デザイン室の配属の以前は第三セクターの株式会社横浜みなとみらい21へ派遣されていて、ここでイベントやシンポジウムを手掛けていました。その経験から、このようなイベントを通した都市デザインを展開したいと考えました。そこで北沢さんと「創造都市」を始めたのです。

私が都市デザイン室に入ったのは1987年です。でも1年間の担当者を経て、次の1年間は再開発課の係長を担当しました。翌年には都市デザイン室に戻り、バルセロナ展を担当し、都市フォーラム等を手掛けました。

都市デザイン室へ移動し、87年に横浜トリエンナーレ設立準備調査を手掛けました。表参道の「From 1st」を手掛けた商業プロデューサーの浜野安宏さんにも協力いただき調査委託をしました。まだ当時はこんにちのトリエンナーレとつながると

小沢朗 土井一成

堀勇良 今井信一

中野創 小田嶋鉄朗

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

賀谷まゆみ 網河功

宮澤好

都市デザイン室、他での、創造都市へつながる活動

1987年度(昭和62年度)	(仮称)ヨコハマ・トリエンナーレ設立準備調査 国際シンポジウム「創造実験都市・横浜会議」 横浜デザイン都市宣言
1988年度(昭和63年度)	第1回横浜アーバンデザインコンペ(馬車道) アーバンデザイン国際シンポジウム 都市デザイン交流宣言 横浜ビジネスパーク・屋外アート
1989年度(平成元年度)	第2回横浜アーバンデザイン国際コンペ(海岸通り)
1990年度(平成2年度)	バルセロナ&ヨコハマ シティ・クリエーション 国際都市創造会議
1991年度(平成3年度)	第1回ヨコハマ都市デザインフォーラム ヨコハマ・アーバンリング NICAF YOKOHAMA'92
・	
1994年度(平成6年度)	金沢ハイテクセンター・金沢広場
・	
1997年度(平成9年度)	北沢猛 都市デザイン室長から東京大学へ
1998年度(平成10年度)	第2回ヨコハマ都市デザインフォーラム 横浜プランナーズネットワーク 横浜まちづくり倶楽部

横浜デザイン都市宣言

現在、われわれの環境は成熟化、情報化、国際化の社会に向かい急激な変化の中にいます。生活にあっては物質的な豊かさを求める時代から、**文化を求め、精神的な豊かさの創造をより重視する**傾向が強くなっています。デザインも、単なる装飾や美的表現としてのデザインから、**生活文化全体としてのデザインへと視点を拡大し、認識を変えていかなければならない**時代に来ています。

横浜では、横浜の魅力を創り出すため、都市を構成する様々な主体を調整し、横浜らしい新しい空間を創出する都市デザインを実践してきました。

この蓄積を生かし、都市と建築を軸に、インテリア、ファッションなどの幅広いデザインと関係する分野の交流を図り、時代に対応し、かつリードする**生活文化としてのデザインを創出して**いくことが、これからの横浜にとって不可欠なことと考えます。

今横浜は、21世紀の新しい都心である「みなとみらい21」を中心に、**創造実験都市として、世界のデザイナーの英知を集め、生活文化の総合的デザインを提案し、議論、研究できる場を提供したい**と考えています。

そしてその成果を生かし、実践することにより「デザイン都市横浜」の形成を目指します。横浜が新しいデザインの情報発信都市として、世界に貢献できるよう努力します。

1988年3月

図8：横浜デザイン都市宣言

は考えておらず、調査では世界的なイベントや事業を調べ、その事業による地域の活性化を調べました。また横浜にふさわしいイベント事業とまちを活性化について事例調査をし、構想を練り上げました。実はトリエンナーレに焦点を絞った調査はありませんが、世界のトリエンナーレやビエンナーレを調査し、集客数やまちへの貢献等をまとめました。当時は「国際デザイン展を横浜でやろう」というのが調査の結論だったと思います。

最終的には、ファッションや商品開発も含めて展開するような国際デザイン展という企画が上げられました。このような調査で国際シンポジウム「創造実験都市・横浜会議」が開催されました。

横浜デザイン都市宣言

ここで宣言されたのが「横浜デザイン都市宣言」【図8】です。都市が「成熟化を迎えている」ということ、「物質的な豊かさを求める時代から、文化を求め、精神的な豊かさの創造をより重視する傾向が強くなってきています」とあげています。当時の時点で文化を含めた都市デザインを展開しくと表しているのです。このような意味で「横浜デザイン都市宣言」なのです。「都市デザイン宣言」ではなく「デザイン都市宣言」と、「都市」と「デザイン」を返しているのは、デザインの幅を広げるためだったと思います。

宣言の中には「都市と建築を軸とする」ということ、「インテリア、ファッションなどの幅広いデザインと関連する分野の交流を図り、時代をリードする生活文化としてのデザインを創出していく」とあります。また「世界のデザイナーの英知を集め、生活と文化の総合デザインを提案して、議論、研究していく場所を提供していきたい」という宣言が上げられています。去年、創造都市で国際会議を開き、世界と議論を展開する重要性を改めて意識しました。議論の場を積極的につくるのが「創造実験都市」の使命だと思うのです。ですから当時はシンポジウム、国際会議を頻繁に開催しました。その一つがこの「創造実験都市横浜会議」事業ということなのです。

バルセロナ&ヨコハマ・シティ・クリエーション

「バルセロナ&ヨコハマ・シティ・クリエーション」という大きなイベントを1990年4月から7月の約2カ月半にかけて開催しました。当時、バルセロナ・オリンピックがありました。前年に文化イベントとして世界の都市で文化オリンピックを開催する提案があり、「バルセロナ展」を横浜で開催しました。

実はバルセロナと横浜は似た都市構造であり、港、また港湾の前面に山下公園のような公園があります。商店街と大通り公園兼ねたような広場、歴史的建造物も残されています。当時、バルセロナではアートを用いた文化的な活動に取り組んでいました。類似する都市構造のバルセロナの活動は横浜の手本になりますので、「バルセロナ展」「バルセロナ・ヨコハマ・シティ・クリエーション」を開催しました。会場は前年の横浜博覧会で使用された横浜館を活用し、さらにパビリオンを設置しました。バルセロナ展の美術展では、ピカソ、現代アート等の美術展、横浜館ではバルセロナのまちや文化の紹介、横浜や世界の都市デザインの紹介等、アート、文化、都市等の展示やイベント等を展開しました。

「歴史都市バルセロナ」「アーティストの工房」では、バルセロナがアーティストやデザインを重んじた地域づくりを紹介しました。当時の横浜が目指すべき姿でもありました。バルセロナが横浜の創造都市のきっかけ・発想の原点のパビリオンでした。

「バルセロナ・アバンギャルドーバルセロナ特別展」では20世紀の巨匠ピカソ、ミロ、ゴンザレスを呼びつつ、現代美術の展開も探りました。これは現在のトリエンナーレにつながっているとも思います。現代美術の展開をバルセロナは都市戦略として政策的に取り組んでおり、このような点を横浜でも広めていきたいと思いました。また「ヨコハマ・クリエーション」では横浜を紹介し、実験的に国際都市創造会議・連続シンポジウムを開催しました。

その他にもゴミ収集車のデザインコンペ、海岸通りや港周辺を対象地域にしたアーバンデザイン国際コンペ、「みなとみらい21」のストリートギャラリーで

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

都市デザイン交流宣言

21世紀を目前にひかえ、都市のあり方や人々のライフスタイルが大きく変わっていく時代を迎えていると思います。たとえば、文化や遊びという要素がライフスタイルに応える街づくりを進めていく必要があります。そのためには、市民の街づくりへの参加を通じて、都市に求められているものを探り、これからの都市ビジョンと街づくりのあり方を、制度の問題も含めて考えていくことが必要だと思えます。

横浜は、都市デザインという街づくりの新たな分野において、積極的な取り組みを行ってきました。しかし、ゆとりと潤いのある街づくりには、さらに長い時間と多くの人々の努力が求められます。今年、市政100周年・開港130周年を迎える横浜は、都市としては若い仲間に入ると思いますが、それだけに可能性も大きいと言えるでしょう。世界の多くの都市でも、新しい時代を迎え、様々な議論、提案が活発に行われ始めていると聞いています。

このような時代に節目に当たって、都市デザインについての議論や新しい考え方が、横浜を舞台に生み出されることを願っています。そのため、1991年に「ヨコハマ国際デザイン展」を開催する予定で準備を進めていますが、都市の環境や生活文化に関する様々なデザインが、総合的に提案されるものと期待しています。特に都市デザインや建築は、その基本となるものですから、多くの方々の参加を呼びかけ、積極的に情報や意見を交換するため、世界の都市や機関と交流を図っていきたく考えます。

1989年2月7日

図9：都市デザイン交流宣言

は当時25街区の工事中のランドマークタワーの仮囲いにアート作品を展示する事業なども開催しました。

ヨコハマ・クリエーション

ヨコハマ・クリエーションは日比野さんが制作し、プロデュースは松葉一清さん、照明は面出薫さんという錚々たるメンバーが手掛けていました。また村上達人さんがプロデュースするパフォーマンスのイベントも開催しました。今にして思いますと創造都市の展開する事業にとても類似していますね。当時としては最先端のイベントであったと思います。

バルセロナのパフォーマンスのグループのなかには壁面へ登って絵を描いていくパフォーマンスや、YOKOAHAMA タワーズでは5人の建築家によるタワーの制作を展開しました。竹山聖さん、杉本洋文さん、小林克弘さん、妹島和世さん、古谷誠章さんが手掛けました。

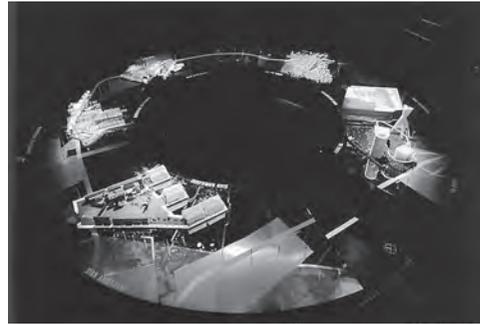
「フォレスト BAY」ではメッシュアートで入口部分を装飾するもので、当時の24街区（現在のクイーンズスクエア周辺）は事業なにも始まっていない状態で、原っぱでしたので「フォレスト BAY」という事業を企画しました。

三菱地所のランドマークタワーの工事の仮囲いの作品は南條史生さんが総合監修でした。キャンバスを用意して大黒ふ頭の駐車場船のワンフロアを借りて制作しました。そのお一人がロコサトシさんでした。今から考えますと、そういった形でもって、かなりこのバルセロナ展は、今の創造都市の事業の前触れとなるようなイベントだったんじゃないかな、というような気がしています。

ヨコハマ都市デザインフォーラム

第1回のヨコハマ都市デザインフォーラムはバルセロナ展の翌年に開催しました。同時に NICAF という国際コンテンポラリーアートフェスティバルを私たちからお声掛けをして民間のギャラリーのみなさんと取組ました。アーティストの作品を売り出すという

図10:アーバンリング展
8人のアーティストと建築家それぞれが割り当てられたインナーハーバーエリアの各場所へ提案
マーケット撮影:浅川敏(ZOOM)



大きなアートフェアです。

このような取組の中で国際デザイン展がデザインフォーラムという国際会議に変化していきました。しかし当時はバブルが弾けたところで協賛金も集まりにくい中でしたが、プレ展示は青山のスパイラルで開催するなど、準備等は手をかけて進めていました。この国際フォーラムのテーマは「都市デザインの新たな展開」でした。

当時のアーバンリング展【図10】は、こんにちのインナーハーバーの議論につながっていると思います。ここではインナーハーバーのエリアをターゲットにし、8人のアーティストと建築家へ場所を設定して各々の提案をいただきました。シア・アルマジャーニ氏は山下ふ頭、レム・クールハースは中央卸売市場など、各々の調査の上での提案を出してもらいました。

全体のコーディネイトは松葉一清氏でした。ちなみに、ダニエル・ビュランは縞を用いる作品を手掛けていて、ここでは縞の煙突を港へ中心に立てるという作品を提示されました。またビュラン氏には全体をつなぐ意図もあつてこのような作品を制作していただきました。

クールハース氏には市場の稼働時間以外での提案をいただきました。市場を多様な用途に使用し、時間で使い方を変え、昼から夕方に掛けては市場以外の展開の空間とするもので、このようなプロポーザルも含めて提案してくれたと思いますし。アルマジャーニは山下ふ頭を広い芝生へというアーティストらしい提案でした。このような提案型事業がこんにちのインナーハーバー構想の初期の取組です。

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

またこのフォーラムでは地域展開型事業も手掛け、市民が議論する場をつくりました。その市民グループには1年ぐらいかけて地元で議論を重ね、その上でフォーラムでは展示やシンポジウムを開催しました。当時からも地域やNPOのような団体をどのように育て展開させるかは大きなテーマでした。市民協働等について議論していきました。

この国際会議自体が確か1年ぐらい掛けて開催し、その活動の中では「UDパートナー通信」を開催の前年から様々なニュース掲載して発信していました。そういった形でもって、少しずつ場を盛り上げながら準備していった記憶があります。

また様々な冊子も作り、『SD』の「都市デザイン横浜」はこの国際会議に合わせて作成し、横浜の都市デザインがまとめられています。また「アーバンデザインレポート」という冊子もつくりました。これは国際会議の時の資料として日本や海外の25程の都市のアーバンデザインの調査報告です。この調査報告は委員会をつくり、各先生方に担当の都市を調査していただき、資料としてまとめました。これを国際会議の基礎資料としてお渡ししました。大変充実した調査資料でした。

この国際会議は単なるシンポジウムではなく事前の調査も含めて様々な仕掛けをしながら開催したのが当時の第1回目の横浜デザインフォーラムでした。98年に第2回目の都市デザインフォーラムを開催しました。第1回目より予算は少ない中でも様々な取組をしました。その一つに「横濱まちづくり倶楽部」「プランナーズネットワーク」などの市民によるまちづくり活動もあります。

第1回国際デザインフォーラム・都市デザインフォーラムでは地域の市民参加型の活動が培われ、第2回の横浜都市デザインフォーラムではこの活動を組織として結成することになりました。市民参加版が「横浜プランナーズネットワーク」です。現在も活動を活発にされています。まち・都市部版が「横濱まちづくり倶楽部」です。第2回目のフォーラムでは中心市街地の活性化の議論をしていました。またこの年には中心市街地基本計画が策定されたこともあり、このような背景から「横濱まちづくり倶楽部」がつけられました。

第2回デザインフォーラムは地域を重点に国際会議を開催しました。地域会議を導入し、関内、みなとみらい、横浜駅周辺、中心市街地活性化の基本計画を策定した年でしたので都心部についての会議をしました。その他に金沢区、都筑区などの港北ニュータウン、また横須賀・鎌倉でも地域会議をし、周辺の都市も巻き込んだ議論を重ね、全体会議へと展開しました。これらが第2回目の都市デザインフォーラムの特徴です。地域会議、地域という視点で市民の方、地元の方と一緒に議論して盛り上げました。

横浜の創造都市とは

創造都市の取り組みは横浜の他に神戸、名古屋、金沢などで行われています。神戸はファッションが中心で、創造都市の担当は企画関連の部署です。名古屋はトヨタ自動車をはじめ工業デザインなどを得意としています。金沢は伝統工芸などを強みとした創造都市となっています。

横浜の創造都市は都市デザイン室が強みです。「まちづくり」なのです。加えて「文化芸術」の活動を取り組んでいます。他に新潟など、様々な都市で取組始めています。各地域によって各々が異なり、各地域の取組は全く違うのです。ですから創造都市は不定形、流動型であって、その都市で方法が違うものであると思います。

創造都市は4月から「文化観光局」へ変わります。文化観光局というなかで創造都市の取組や都市デザイン室の今後の展開など議論をしております。横浜の既存の魅力、都市デザイン室が培ってきたこれまでの活動に加えて、歴史的建造物や港、また倉庫などが残っていますので、新しい価値を加えて横浜として展開しなければと思うのです。

私が担当する創造都市では文化芸術という視点で取り組んでいますが、文化芸術のみでなく、既存の魅力へプラスして新しい価値を与えることが横浜らしいのではないのでしょうか。そして最終的には都市文化をつくり、横浜らしい、横浜しかできないライフスタイルの実現が「創造都市横浜」からつづく文化観光局の基本として考えたいです。

ハードだけでなく、面白い人、志しある人々をいかにして横浜へ集め、集まるか、ということを考えるべきです。「創造者」である面白い人、楽しい人が横浜に集まることによって、横浜の良さは決まると思うのです。横浜のベースである都市という景観と美しいまちには、そのような人々が集まり、展開することが、街をさらに活発にさせていくと考えられるのです。

例えば、アートマーケット、コンバージョン等は人を集めるための道具で、街には産業がなければ、まちも人も生きられません。そこで、クリエイティブ産業を集めることができるならば、横浜の都市のベースや産業が興ってくるのはと思うのです。その産業の中にはニューツーリズムやアフターコンベンションなど観光と文化を結び付け、創造都市と都市デザインを結び付けることがこれからの横浜と思っています。

アジアの横浜

今、観光としてアジアからの集客をする構想があります。アジア諸都市との交流などは大事なことです。横浜はアジアの都市との共通点が多いものですが、そのなかでもアジアの都市の重要なポジションに位置しなければと思います。アジアの文化を重んじ、また昨今ではアジアとの交流が重要な時代になりつつあるのです。

これからの横浜で大事なことは、横浜をどのようにプロモーションするべきかを考察し展開する事です。その一つとして昨年「INVITATION to OPEN YOKOHAMA」を始めました。横浜のアピールを戦略的に考える必要があるためです。横浜全体としてのイメージ戦略や都市ブランドの形成が今後の課題です。

これまでの都市デザイン室は、まち並み、歩行者空間、歴史、都市空間、水と緑のまちづくり、創造都市等を展開してきました。今後はインナーハーバー構想のように都市全体の拡張や展開、都市計画を含めてどのように考えるべきか新たな議論が必要であると思います。都心部の活性化、経済の活性化も含めたまち並み形成等、大きなところから小さなところまで複合的に考えることが重要な視点です。

また横浜では「歴史」に関する取組も長く手掛けていますが、今後は倉庫の活用や古い建物のコンバージョン等も都心部の活性化につながると思われます。いかに既存の施設を、まちを有効活用するかと真剣に考えていくか。そのためには耐震の問題等様々な問題があり、それをうまくコーディネートしていく、ということが非常に大切なキーワードじゃないかなというふうに思います。もう一つのキーワードは環境問題と都市デザインをどのように取組が大きなテーマです。市民との協働やその中で都市デザインを改めて考えていくことが課題です。

そして「議論の場づくり」です。横浜では盛んに仕掛けるべきものであり、北沢さんが仕掛けたように、これまでは国際的にも、地元においても「議論」の場がありました。社会のなかで都市デザインの中心となるためには、今後も議論の場を横浜で提供していくことが大事な要素であると思っています。

鈴木：ありがとうございました。横浜の都市デザインはスモール都市デザインとラージ都市デザインがみられます。スモール都市デザインは都市デザインに関する担当や都市デザイン室などが中心に切り開く動き、ラージ都市デザインは政策的な流れのように横浜市全体を組織的にも政治的にも動かす動きです。

都市デザインが生み出した一つの流れとして、創造都市の取組みは文化政策の方からの流れもあり、その二つによって創造都市の取組みへつながったと思います。そもそも「歴史を生かしたまちづくり」と「水と緑のまちづくり」の背景をみると、80年前後の基本問題調査後に都市デザインについての議論が上げられます。この議論から「歴史を生かしたまちづくり」と「水と緑のまちづくり」へと展開していったわけですね。そして80年代に「デザイン都市宣言」など都市デザインを解釈する政策的な流れが生まれてきたと思うのです。

「創造都市」の様々な背景

秋元：80年代は基本的な都市デザインの方向性が示されました。90年代からは、新しい展開の模索を

土井一成
小沢朗今井信二
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

試みた時代で、その取組では著名人、アーティスト等、活躍ある方々にお話を伺いました。そのお一人がNDC グラフィックスの中川憲造さんです。こんにちの横浜の代表する方です。お話を聞き、どのような展開になるのか、たくさんの考え方が提案された時代で、模索をし始めた時代であったと思います。

私が文化について取組始めた当時、東京では歴史的建造物とか倉庫とか活用して文化芸術を展開し始めていました。これらは民間が始め、運営をしていました。横浜でもこのような形態を目指さなければという話もありました。

「横浜フラッシュ」というイベントもこの時期でした。87年頃だったと思います。現在は神奈川県警がありますが、当時は三菱倉庫がありました。その倉庫と前面の運河で光を用いるイベントを仕掛けたのです。このような活動に芸術文化、現代アートに都市横浜の可能性があるのでと試みました。

都市デザイン室も様々な試みをしていました。歩行者空間、プロムナードなどを手掛け、その後は道路局に引き継がれていきました。このように基本的に都市デザイン室は、新しい試みを実践して他の局へ引き継いでもらい、とにかく試みを実践する考えでした。「水と緑のまちづくり」も先進的な事例をつくり、他の担当部局へと引き継がれました。都市デザイン室は「0点はダメ」という考えですから、100点満点に届かずとも、様々な調整の上でいくつかを成立させることを目標としていました。また様々な人との議論を始めたこと切掛けに、ソフトの提案、担い手の育成、そして文化芸術への取組などの新しい展開を考察していたころだと思います。

地域まちづくりは、第1回の都市デザインフォーラムが大きな切っ掛けです。それまでも都市デザイン室ではいくつかのワークショップを手掛け、その一つに南太田の公園を造るためのワークショップを手掛けましたが、まだ体系的ではありませんでした。

第1回の都市デザインフォーラムが地域展開型事業として地元の団体との取組が始まり、都市デザイン室が地域まちづくりを本格的に取組始め、後に都市デザイン室の市民まちづくり担当というセクションが

できました。このセクションは後に他の部署に引き継がれましたが、当時は都市デザイン室として市民まちづくりに積極的取組しました。

国吉：政策的な流れや、文化への着目については頻繁に議論をしました。

パブリックアートについては、横浜は他の都市に比べて早い時期から手掛けました。横浜のパブリックアートは、街の空間演出に合わせて設置を工夫しました。フランスではアーティストが都市づくりを手掛けています。セルジーポントワーズという新しいニュータウンの都市軸を美術家が提案して、都市計画家を含むチームと連携してまちをつくる取組をしています。このように都市づくりへアーティストが関わる政策が実験的に活動されており、都市とアートの関係はこのような手法もあるのではと、議論したこともありました。パブリックアートのこれからの展開として、都市空間を飾ることだけでなく、アーティストが都市に関わるという手法は重要なヒントになったと思います。

横浜市における都市としての生き方を田村明さんと幾度と議論したところがあります。経済都市として活発化し、業務集積を図ることは目標ではありませんが、あくまでも横浜は東京を支えるセカンドシティーなのですよね。イタリアに例えるとミラノ、スペインのバルセロナ等が上げられ、これらの都市ではデザイン都市、文化芸術都市などの取組がなされているのです。このような取組は一つの参考として横浜の可能性を考察したことがありました。そして、様々な取組の末にバルセロナ展などへと仕立てていったのです。

ですから都市活動の新たな展開として、一つのきっかけとして、文化芸術やデザイン都市を着目し、次の戦略を議論しました。そして多くの方々をも巻き込みながら活動を膨らましていった取組です。

鈴木：本日の講義はこれまでのシンポジウムやフォーラム等の話が多く、これらの動きが都市を活性化させたとも改めて思いました。その背景には海外の都市づくりの動向や情報をキャッチし、例えば都市デザインフォーラムをきっかけに議論の場がつくられまし

た。そして、こんにちの横浜のキーパーソンがここから産まれるなど、このような人的な資源の注目する流れが出てきました。この動きの点が徐々に線となって、昨今の創造都市へつながっていると思うのです。

当時のイベントに関わられていた南條史生氏は第1回のトリエンナーレのキュレーターの一人名になりました。このように創造都市への取組につながる人的ネットワークを培うきっかけであったと思います。

秋元：議論する場、そして沢山の人を巻き込んでいきました。南條さんはこの取組をきっかけに都市と関わりをもち、パブリックアートを実践的に活動してきました。そこで都市づくりに巻き込まれていったのかもかもしれません。南條史生さん、中川憲造さん等、多くの方々とのつながりをつくり、巻き込みながら展開していったと思います。

北沢さんは人を巻き込むのがうまかった。横浜にこのような方々を呼び込み、そして「仕事」をしてもらう。「仕事」を展開する。この流れを生み出すことが上手でした。他都市の事業を考えると、ハード整備だけでなく、人がまちをつくっていることがその地域の原点であると思うのです。「人」に非常に力を入れた都市は面白くて、魅力につながると北沢さんは考えてくれたと思うのです。

欧米諸国の創造都市構想と同時期に

鈴木：北沢さんは東大にいられた当初、アメリカのアーバンデザインを改めて研究してアメリカのアーバンデザインの研究会のような機会をつくりました。アメリカのプランナーのウェイミング・ルーは、セントポールのロアータウン再開発公社をつくり、トーマス・マックナイト財団の支援を受けて活動を始めました。公社といえども小さな組織でしたが、活発な取組をされていました。疲弊した都心部をアートイベントや、アーティストやクリエイターが活動するアーティスト・イン・レジデンスのような場をコンバージョン型で供給しました。このような手法での都市の再生を展開させていました。

諸外国の事例、動きをタイムリーにキャッチし、政策化したのが2004年の創造都市の構想につながったと私は考えています。当時ヨーロッパでは創造都市の議論が高まり、カルチュラル・ポリシーからカルチュラル・プランニングへ、文化政策から文化計画へという動きがみられるようになりました。また空間的な要素の提案など発想され、これらを都市づくりと統合する展開する流れがつけられたのです。この流れと、タイムラグなしに横浜も創造都市への取組ははじめました。

秋元：当時は、文化芸術がどのように都市文化をつくり、また人をどのように呼び込むかと模索していました。「文化、芸術、プラス観光」であり、「プラス観光」を意識した時代です。文化芸術によって都市文化をハード整備のみではなく、ソフトも考えながら組み込んでいこうと取組み始めたのです。芸術・文化・観光を用いた都市の成長、横浜独自の都市文化をつくるという議論を委員会でした。北沢さんのお考えは恐らく委員会を始めた時期には「創造都市」への確信があったと思います。

小沢：80年代後半にこれからの都市デザインの展開を考えるためにヒアリングをされたとありましたが、どんな人を、どんなテーマで話をしてもらうか、また次の機会への糧にするテーマなど、選び取るセンスは、どのようなお考えがあったのでしょうか。

秋元：一般的な「都市」に関する会議では建築や都市の専門家に構成されることが多いので、都市問題基本調査ではコンピューターグラフィックや、ジャズの音楽家などへと広げました。ここで判明したことは、みなさん「都市が好き」であり「横浜を気に入っている」ということです。その中で、お話の節々から横浜へ、これからの都市へのヒントが見出されました。

この取組で最も大きな成果は人脈をつくったことです。幅広い人脈につながり、また都市に対する考え方が、それまでのハード中心から、ソフト的として文化や芸術への展開に結び付いたのです。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

細河功
賀谷まゆみ

宮澤好

鈴木：人脈という強さを手に入れ、またハード政策からソフトへと転換された横浜。これからの横浜の都市デザインのポイント等いかがでしょうか。

秋元：都市デザインは非定型・流動的です。都市デザイン室は「歴史を生かしたまちづくり」「水と緑のまちづくり」などを展開させている中、私なりに一生懸命知恵を絞って自分にできることを考え模索しました。都市デザイン室は都心部活性化から始まりました。この流れの中で横浜における歴史・文化を生かし、活性化させることは基本です。その活性化は経済のみでなく、横浜で暮らしている人や働く人、活動をする人々がどうやって楽しめるか、充実した活動ができるかを追求する必要があります。その上で活性化と市民協働は同じようなテーマとなると思います。地域の人と横浜を楽しめる「まち」することが大きな課題です。

そのためには再生型のように地域の現状の形を生かしながら、その中に新しい要素を挿入させるようなまちづくりがこれからの手法だと思います。その挿入でハレーションを起こし、まちを楽しくさせる展開がこれからの方法です。これからはスクラップアンドビルドは適しませんので、既存の状況を生かしながらソフトや機能をどのように展開させるか、横浜独自をどのように考えるか根本であると思っています。

鈴木：「横浜の都市デザインとは何か」という根本的な問いに戻ると、今までの都市計画がカバーできていない領域や、都市計画が抱えている欠陥みたいなものを、改革していくような運動論、新たな都市政策や都市計画の潮流を作るものであると思います。

コンバージョン・リノベーションのように再生型のまちづくりがこれからの一つの柱になるのではないのでしょうか。現状では政令都市レベルで再生型のまちづくりというのを一つの大きな柱に掲げている自治体もないと思いますし。

郊外部の都市づくりにおいても、リニューアル、リノベーション、コンバージョンによって、まちを変えていく手法を確立する必要があると思っています。

受講者：お話、ありがとうございました。今日のお話で秋元さんのお考えや横浜市と都市デザインについて体系的にお話を伺うことができました。

横浜らしさや横浜の特性の場合はフィージビリティ・スタディー的に様々な活動をする場所でもあると思いますし、それらを他の地域に展開していくという発信の場所になっているとおもいます

例えば環境とかエコについてです。「スマートシティ」についても横浜は取り組んでいます。このような様々な動きをトータル、かつ横のつながりをインテグレートさせた上で横浜市は進めていかなきゃいけないと思うのです。広い意味での横浜市内の中のこれからの動きや展開について、どのように思われますか。ニュアンスをお聞きできればと思うんですけども。

秋元：あくまでも私の見解ですが、これからは、様々な展開の文化がフォーカスされ、シティープロモーションなども強化されるものかもしれません。文化振興部と観光部隊の横つなぎができるのは創造都市ではないでしょうか。まずは横浜をどのように面白くするかを改めて考えなければと思っています。トリエンナーレやOPEN YOKOHAMAなどの事業を創造事業で手掛けています。この背景には文化や観光などの都市として様々な活動をどのように結び付けるかという方法への確立のために実験でもあります。その手法が確立され、軌道にのったならば、他の機関などへ継承して渡していきたいと思っています。そして新しいことを創造都市で実験するということを繰り返して、展開をしていけたらな、と私は思っています。

文化においても観光においても様々な展開があると思います。着地型観光のように様々なツアーなど市民のための観光です。観光客を呼び集めるだけでなく、市民自身が楽しめる観光を展開させたいと思っています。

文化と観光という中で創造都市の役割は幅広く、そのためにはいろんな方と議論をし、知恵を集めていかなければいけません。環境問題や地球の問題までも含めて都市デザインをどのように結び付けていかを考えないといけないと思っています。

これまで都市デザイン室は、各時代と時と場に応じての問題点を「都市デザイン」という概念でどのように解決すべきかと取り組んできましたし、創造都市も基本的には同じような考えのもとで活動しています。その時代の展望、課題への対応や取り組みが、横浜を生きつかせる、生き残る道に続くのではと私は思っています。

鈴木：逆の捉え方をすると、何か新しいことを手掛け、新しいイノベーションを起こしていく、ということでもあると思います。一定の定まった方法を用いないとも捉えられがちですが、私はその点を重要なポイントだと思っています。政策のイノベーションを生む、それを自認する組織が組織の中にあることの重要性を、今のお話をから感じました。

ただ、継続的にそれを見る視点というのがなければ実現は難しいです。大きなゴールのイメージや目指すものを踏まえていなければ場当たりの対処になってしまうものです。今日、秋元さんにお話ししていただいたように、点と点ではあるけれども、その背景には創造都市の一本の道筋が存在します。この道筋を意識してどのような道を目指すべきなのかと意識しながら、都市デザインに関わる人たちが動いてきたことが重要であると思います。これまでとこれからをつなぐ道筋を慎重に考えなければいけないと改めて認識しました。

秋元：古い建物のコンバージョンは、いろんな意味があると思っています。港の倉庫、戦災復興の防火帯建築、黄金町の取組など社会問題も含めてどのように取り組むべきか。これまでのように、スクラップやクリアにするのではなく、既存の街や地域を生かしながらどのように発展させていくか。解決できてない問題ですし、様々な場面に応じて取り組まなければならないです。

郊外の商店街や住宅地もいろんな問題を抱えています。これらをどのようにコンバージョンしつつ発展させる取組は、各々の地域から様々な形で発せられるのではと思うのです。このような中で取組のスタート

や展開は戦略的に考えて展開しなければと思います。横浜の都心部の建物のリノベーションだけでいろんなパターンがあると思います。

環境問題についても、屋上緑化のような設備投資のみでなく、都市の全体を踏まえた戦略や横浜らしい取組を考えていかなければと思っています。福祉問題も同様で、障がい者とか高齢者等の様々な問題も「都市デザイン」としての視点や戦略の上でどのように解くべきか。環境、福祉などにも限らず、様々な機関、専門家をも踏まえて議論が必要であると思います。

鈴木：インナーハーバー構想で環境問題を議論しました。CO2の削減目標の議論の際には装置産業へ話題が移ってしまうことが多いものです。自動車の交通量、建築物の環境対応などが中心になりがちです、しかしそれらの目標の達成ためには都市のつくり方から変えなければ難しいと思うのです。

その点を踏まえると土地利用の問題であると思います。かつての横浜の都市デザインは「プロジェクト」「コントロール」「都市デザイン」の三つの指針をもって動いていました。これからの環境問題と地球温暖化の問題に取り組みには、土地利用を踏まえて取り組み、政策的に、横断的に、問題を解いていくアプローチが必要であると思います。

きょうは秋元さんに貴重なお話をしていただきまして、ありがとうございます。改めて拍手をお願いいたします。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好